

離陸に難航する「空飛ぶタクシー」

◆各社がしのぎを削り、華やかな話題が先行するeVTOL

ドイツのベルリンで2024年9月に開催された世界最大級の家電見本市「IFA 2024」では、米スタートアップAlef Aeronauticsによる陸空両用のeVTOL（電動垂直離着機）の自動車のような外観のコンセプトデザインが展示され話題となった。道路の渋滞時には他の車の上を飛ぶことができる。1機30万ドルからだ。

開催地ドイツのリリウムは、サウジアラビア国営航空からeVTOL 50機を既に受注しており「空飛ぶタクシー」への期待は大きい。しかし話題先行の感もある。

◆莫大な資金が必要、航空安全認証取得もネック、五輪や万博での商用飛行断念

リリウムは当初24年中の有人飛行を目指していたが、25年に延期した。安全性試験などに費用が掛かるが、資金調達が難航し、外国企業への身売りも検討された。結局地元バイエルン州が、5,000万ユーロの債務保証を行うことになった。

「空飛ぶタクシー」計画を掲げるドイツのボロコプターも、24年5月に破産の噂が流れるなど、資金調達に苦慮している。エアバス系列企業CEO出身の同社CEOは25年2月に退任する予定だ。ボロコプターは、環境配慮を掲げたパリ五輪で空飛ぶタクシーの運用を目指していたが、断念している。パリ市が「eVTOLは電気自動車よりも環境負荷が大きく、通常のタクシーよりも割高だ」として否定的であったことに加え、欧州航空安全機関（EASA）の承認が得られなかった。

日本でも、25年の大阪万博で空飛ぶクルマの商用飛行を目指していたJALとANAが、24年9月に一般客を乗せての飛行を断念し、デモフライトへ切り替える。eVTOLは飛行機と同様に安全飛行に必要な型式証明が必要だが、その取得が遅れている。丸紅とスカイドライブも既に万博での商用飛行を見送っている。

24年9月12日、欧州経済研究センターは、eVTOLに関する研究結果を発表した。「エネルギーを大量に消費する夢物語」という。内燃エンジン車よりは二酸化炭素排出量は少ないが、電気自動車より劣る。費用面では、タクシー運賃の2.5倍、自家用車利用時の15倍高くなると試算する。離着陸スペースも必要だ。富裕層向けか、緊急時の活用や遠隔地との接続の利用になるという。 【赤山英子】